

トルコにおける新教育課程での社会科教育の展開

－教科「社会科」の指導書を手がかりに－ (1)

社会科教育講座 (社会科教育) 西脇 保幸

The Practice of Social Studies Education in Turkey's New Curriculum (1)

Yasuyuki NISHIWAKI

目次

1. はじめに
2. 新教育課程の方針と教科「社会科」の展開
 - 2-1 新教育課程の方針
 - 2-2 教科「社会科」の展開
3. 「社会科」指導書にみる授業の構想
 - 3-1 「社会科」学習材と教師用指導書の構成
 - 3-2 4年生「第2単元：私の過去を学んでいます」(以下次号)
 - 3-3 5年生「第8単元：私たちみんなの世界」
 - 3-4 6年生「第3単元：私たちの国の資源」
 - 3-5 7年生「第3単元：トルコ史の旅」
4. 新教育課程による社会科教育の課題
5. おわりに

1. はじめに

とりわけ2000年代になってから日本をはじめ多くの国々で教育改革が実施されているが、トルコにおいても教育改革が展開されてきた。社会系教科についてのその動向は、拙稿(2006)や拙稿(2009)でも報告されてきた。拙稿(2006)では教科「社会科」の刷新の方針が紹介され、拙稿(2009)では新教育課程による地理教育の動向が学習内容や学習方法の視点から分析されている。拙稿(2006)では、刷新に基づく授業の実態分析の必要性が課題として確認されたが、研究成果を一般論として位置付けるだけの授業観察の機会が得られないので、本論ではその代替措置として、2004年の教育計画に基づく「社会科」の授業が具体的にどのように展開されているのか、その指導書を手がかりに考察することにする¹⁾。指導書が国民教育省から刊行されたものであるうえに、後述のように、新課程の理念が従前のそれとは著しく異なるので、授業実践上に果たす指導書の役割はかなり大きなものと考えられる。それだけに、指導書による授業の分析が、研究上有効なものであると想定される。

2. 新教育課程の方針と教科「社会科」の展開

2-1 新教育課程の方針

拙稿(2006)で紹介されているように、科学技術の変化が急速に進み社会の変化が著しい今日、トルコにおいても、そうした変化に対応した教育が求められ、教師は、子どもに必要な知識を得るために不可欠

な能力を獲得させ、子どもが得られた知識を意味づけて考察できることを保証するようであればならない、と考えられるようになった。すなわち、学習が積極的に知識を追求、意味づけ、新たに構築する過程となるように、方法知の学習にも力点が置かれるべきであるとの論調が見られるようになり、そうした教育観をもとに、トルコの「社会科」教育についても、アイデンティティ育成のための知識理解重視型の旧来の教育からの脱却が図られるべきだ、とする思潮が高まった。

こうした「社会科」教育刷新の動向は、文部行政にも反映されることとなり、「2004年国民教育省社会科教育計画」が策定される運びとなった。この教育計画では、市民的資質として「21世紀の現代的なアタテュルクの原理や革命を身に付けていること、トルコ民族の歴史や文化を把握していること、基本的な民主主義の価値を身に付けて人権に敬意を払い、生活環境に敏感になり、知識を体験によって解釈し、社会的文化的な脈絡で構成し、使用し、整理する（批判的に思考し、創造的で正しい判断をする）社会参加能力が発達していること、社会科学が科学的な知識を生み出している方法を獲得していること、トルコ共和国の社会生活で活動的、生産的で、権利や責任を知っていること」があげられている（オズテュルク及びディレッキ Öztürk ve Dilek, 2005, p.464）。そして、この教育計画において育成されるべき子ども像や教育目標は、以下の12点に具現化された。すなわち、

1. それぞれの子どもが個人として固有の存在であることを認める。
2. 子どもが将来の生活のあるべき姿を示し、期待される特質が開発されるような感覚を示す。
3. 知識、概念、価値や能力が発達することを保証し、学習や学習の実現を重要視する。
4. 子どもに考えさせたり、疑問を出させたり、見方のやりとりをさせたりするように努めさせる。
5. 子どもが肉体的・感覚的に健康で、幸福な個人として育つ。
6. 国民的なアイデンティティを中心に普遍的な価値が獲得されることに、重点がおかれる。
7. 子ども自身が習慣や慣例の枠内で精神的、道徳的、社会的、文化的な面で発達する。
8. 子どもが権利を知り、活用し、責任を果たす個人として育つことが重視される。
9. 子どもが社会的な問題に対して敏感になることを保証する。
10. 子どもの学びの過程で、体験を活用したり、環境との相互作用を組織することの可能性を保証する。
11. それぞれの子どもに到達できるように、学習指導の手段やテクニックでの多様性を考慮に入れる。
12. 定期的に子どもの学業ファイルに目が向けられ、学習指導過程の流れの中で評価の可能性を保証する。

こうした育成されるべき子ども像や教育目標から明白なように、新教育課程では、子どもの活動が中心となり、知識と能力のバランスを図り、子ども自身の体験や個性を考慮して、社会に積極的に関わる能力を育もうとしていることがわかる。トルコの「社会科」教育が、知識理解によるアイデンティティの育成を目指した従来の社会科教育から、子どもの個性や主体性を基盤にし、社会の変革や新たな創造を担える公民を育成する社会科教育に重点が移されたのである。

2-2 教科「社会科」の展開

前述の方針をもとに、「社会科」の新たな展開が構想されたが、教師用指導書での「社会科」のねらいについての解説をもとに考察すると、構想の基本は次のようになる。

まず、全世界の個人・社会・経済の分野で生じている変化や発展は、トルコでも人口構成や家族の特性、生活様式、生産や消費の型、情報技術、労働関係と労働力の特性、グローバル化の過程で見ることができるとおりで、この全体的な変化や発展が、「社会科」を構想する際の重要な視点となる。しかし、それとともにトルコ革命・トルコ共和国の基本理念であるアタテュルク主義（ケマリズム）²⁾ やトルコの歴史と文化を把握し、基本的な民主主義的価値を身に付けて、人権を尊重し、生活環境に敏感で、情報を経験から解釈して社会的・文化的な脈絡において構築・利用・整理する社会参加能力が開発されることも、視野に入れられている。社会学者が科学的な知識を生み出すときに用いる方法を獲得して、社会生活に積極的にかわり、権利と義務をわきまえたトルコ共和国の公民（vatandaş）を育成することが、「社会科」の

基本的な目標とされているのである。

2005年12月告示の新教育課程においても「社会科」は初等教育学校の必修教科とされ、従前の教育課程と同様に、4年生から7年生まで各学年とも週3時間の履修となっている。したがって、前述の構想による9つの学習領域、すなわち1. 個人と社会、2. 文化と遺産、3. 人間・場所・環境、4. 生産・分配・消費、5. 時間・継続・変化、6. 科学・技術・社会、7. 集団・機構・社会的組織、8. 権力・行政・社会、9. 地球的な結びつきが、4年生から7年生までに配分されて、以下に見るような単元構成が設定されるにいった（単元名に続いて括弧内に記されている項目は小単元の主題）。

4年生

第1単元：自分自身をよくわかっています（私は誰？；成功した人々；私はトルコ共和国の国民です；私の感情と思考の世界；私の人生と家族；このような人たちもいます）

第2単元：私の過去を学んでいます（私たちは家族の歴史を書いています；私たちの文化；私たちは祭典に行くところです；学生時代のアタテュルク；トゥラプルスガルブからチャナッカレへ；ムスタファ・ケマルがサムスンに上陸しています；セーヴル条約に対して；諸戦線；私たちの英雄たち；祖国解放戦争でのトルコの婦人；共和国が創設されています）

第3単元：私たちの暮らす場所（方位；略図；天気はどうなるのでしょうか；私たちは測候所に行くところです；カレンダーの紙片；私たちの自然環境；安全な生活）

第4単元：生産から消費まで（はじめに私の必要不可欠なもの；私たちは勘定して生活しています；ヤセミンには責務があります；あなたは消費者としてどんなことを知っていますか；私のところにどのようにして届けられるのでしょうか；必要不可欠なものと職人）

第5単元：幸いにもあります（私たちの身の回りにある工業技術製品；人間と時間；交通手段技術における発達；粘土板から紙へ；ジェレンの探究計画）

第6単元：みんな一緒に（社会集団；社会生活における支え合い；私たちの身の回りにおける社会的な組織；私たちの身の回りにおける公的な機関；教育上のクラブ；私たちの環境をきれいにしましょう）

第7単元：人々と行政（地方自治の首長のことをよく知みましょう；私たちの役所；私たちの国会；私たちの祝日）

第8単元：遠くの友達（世界の子どもたち；遠くから来ました；オランダではじめてのチューリップ；先祖の故郷から1つの国；今韓国にいます；今日は！チュニス）

4年生での学習内容は、第1単元で学習者に家族の一員や国民としての自己を確認させるとともに、個人によって感情や考え方が異なることなどを学ばせたあと、第2単元で家族史に論及し、家族の関係者・祖先が関わったであろう祖国解放戦争など、共和国成立にいたる国民闘争の歴史を学ぶことになっており、文化や伝統についての学習とともに、トルコ人としてのアイデンティティの育成が図られる学習となっている。第3単元の地図と国土の自然環境の学習、第4単元の食料の生産過程とその進歩や消費者としての必要な知識などについての学びは、子どもたちが暮らす国土の環境とそこでの生産の営みを理解するとともに、生産から消費へという経済活動の基礎を把握することに主眼が置かれている。第5単元は、そうした経済活動の発展を支えた科学技術の重要性を確認させている。第6単元や第7単元では社会生活を営むための社会組織や行政・政治の仕組みを学び、第8単元ではトルコと関連の深い5か国について異文化理解による国際理解の学習がなされるが、これらの学習に相当する内容は従前の教育課程では6年生・7年生が対象となっており、多領域にわたる学習内容が盛り込まれる新課程では、その分早めに取り上げた格好になっている。ちなみに、第8単元の「遠くから来ました」では、第一次世界大戦中のチャナッカレ（ダーダネルス海峡）の戦役に参戦したオーストラリアを取り上げているし、「先祖の故郷から1つの国」とはトルコ系民族の国トルクメニスタンのことである。

5年生

第1単元:自分の権利を学んでいます(私の一日;私は楽しんでいます、学んでいます;人生の中から;キャンプでの生活;私の権利と責任;私の子よ、権利があるよ。)

第2単元:だんだんにトルコ(美しい私のトルコ;影絵芝居;私たちの民謡;都市が思い出させるもの;見事な手;私たちの文化的な豊かさ;アタテュルク主義の思考体系;共和国、万歳;アタテュルクと婦人の権利;最後の日々)

第3単元:私たちの地方をよく知りましょう(私たちの暮らす場所;メルヴェはどこに住んでいますか;地図が語りますか;私たちの地方の気候;私たちの環境での居住;自然環境と手に手を取って;内アナトリア地方をよく知りましょう;自然災害と共に生活する準備ができていますか)

第4単元:私たちの生産(生産性の高い土地;ある経済活動;肥沃な私の国;私たちは自動車工場にいます;どんな仕事も苦労は付き物です;私はシイル(siir)を織っています;大衆の最初の教師;私たちも生産者です)

第5単元:実現する夢(科学技術の冒険;私たちは科学者を調べています;アタテュルク、科学と科学技術;科学と手に手を取って)

第6単元:社会のために働く人たち(どの仕事もまず健康から;過去から今日までの新月社;民間の社会組織;環境のために働く人たち;文化財の保護;彼らはそれぞれ慈善家です;トルコ軍)

第7単元:1つの国家1つの国旗(法律は私たちのためにあります;私たちの法律;私たちのための共和国と民主主義;国民主権と独立は私たちの象徴です)

第8単元:私たちみんなの世界(私たちの輸出入品;私たちはドイツにいます;ナイルの国;日本での船;コーヒーのひとつ;“白い金”の国)

5年生の学習では、8つの単元のうち第2単元、第3単元、第4単元、第8単元で、自然と文化の豊かさや産業経済活動からの国土認識と子どもの住む地方の認識、自然災害などを例にした地人相関論的な考察、経済的結びつきからの国際理解の学習になっており、地理的な学習が過半を占めている。ただし、「だんだんにトルコ」の単元ではトルコ革命史の学習も組み込まれている。その他の単元では、第1単元で権利や協力、責任といった概念、第7単元で法律と民主主義についての学習がなされ、公民として直接必要な知識を習得させている。また、第5単元で社会に貢献する科学技術の進歩について、第6単元で医療・文化財保護・環境保全などに貢献する人や組織についてそれぞれ学習することになっており、社会に貢献できる公民としての意識の育成が目指されている。5年生の学習内容は、4年生と同様にトルコ革命史や国際理解の学習が含まれているものの、総じて子どもにとって身近な題材から公民として必要な社会認識の育成を図るように構成されていると考えられる。

6年生

第1単元:私は社会科を学んでいます(新しい学校と新しい機会;紙から苗木へ;私は科学的な追究をしています;私たちの権利は問題解決の鍵です;私はトルコ共和国の積極的かつ社会的な国民です;アタテュルクと社会科学)

第2単元:地表での生活(私たちは世界を発見しています;紙上の世界;四季;トルコの四季;様々な場所、異なる生活;過去から今日までの居住;誰が来て誰が去ったのでしょうか)

第3単元:私たちの国の資源(どこからどこへ;私たちの資源が利益に変わっています;地下から地表の豊かさへ;エネルギー資源は私たちには預かりものです;アイランを飲みましょう;活力を与える計画;私の税金は私に戻っています;森林の財産;お茶の話;足跡を残した人たち;私たちが職業を選択する際)

第4単元:私たちの国と世界(私たちは世界のどこにいますか;誰がどこで働いていますか;私たちの輸出と輸入;文化間の架け橋;トルコ民族の世界;私たちは手を携えています)

第5単元：シルクロードのトルコ民族（東西の架け橋；最初のトルコ民族国家；碑文にみる文明；文明に名前を出す人々；新たな宗教；ジブラルタル海峡の両岸；トルコ民族の新たな生活；中央アジアからアナトリアへ；私たちの伝統と風習）

第6単元：民主主義の冒険（民主主義とともに；生きている民主主義；文書の言葉；私たちの基本的権利；平等に向かって）

第7単元：エレクトロニクスの世紀（生活の中における社会科学；進歩に限界はありません；医学と助け合い；海賊版作成者にNO；生活で一番本当の導師は学問です）

6年生の学習では、まず第1単元で社会科を通じて学ぶ社会科学的な視点や追究の過程、公民としての自覚などを確認させている。第2単元は、前半で世界やトルコの異なる気候などを学ばせてから、後半で有史以前から今日まで定住に影響を及ぼす要因や、アナトリアの古代史について学習させる構成となっており、地理学習から歴史学習へうまく繋げている。第3単元では、資源と経済活動の関連性、納税の必要性や重要性、人的資源と経済の発展との関係などを学習するが、そうした経済学習を第4単元で拡充し、世界の産業・経済やトルコと世界の結びつきなどについて学ぶことになっている。第5単元は、第2単元の後半に続く通史学習で、初期トルコ民族国家の成立からアナトリアへの移動までの歴史やイスラム教の誕生と普及について学習する。第6単元は公民としての基本的知識である民主主義や権利・平等についての理解が図られ、第7単元で科学技術の進歩と知識の重要性など、科学技術社会に生きる公民としての素養を育むことになっている。

7年生

第1単元：コミュニケーションと人間関係（コミュニケーションは“私とで”始まります；好奇心に富んだ目はTRTで；私たちは自由についてパネルディスカッションをしています；アタテュルクとコミュニケーション）

第2単元：私たちの国の人口（私たちはどこに住んでいますか；何のために私たちは数えられているのですか；国家と国民が手に手を取って；今日は！私のお腹をいっぱいにしてくれる国土；居住と移動の自由）

第3単元：トルコ史の旅（祖国、アナトリア；オスマン帝国の創設；オスマン帝国の新たな首都で；異なる文化が併存しました；私たちの道はスィヴァスに通じました；私たちは影響を与えました、与えられました、しかしどのように？；旅行者の目からのオスマン文化；刷新とオスマン帝国）

第4単元：経済と社会的な生活（母なる大地；国家はどのように発展するでしょうか；腕力から機械力へ；終わりなき支え；どのように教育が受けられたのでしょうか；自分の職業をどのように私は選択しなければならぬのでしょうか）

第5単元：時代の中の科学（発明の冒険；言ったことはなくなりますが、書いたものは残ります；学問の遺産；変化と発展）

第6単元：生きている民主主義（総会から国会へ；共和国の番人へ；行政の核心；環境法、諸政府の悩み；ボーイスカウトはいつでも準備ができています）

第7単元：国家間の架け橋（2発の弾丸と何百万人もの戦死者；世界で何が起きているのでしょうか；何故保存しておかなければならないのでしょうか）

7年生では、第1単元で、コミュニケーションの人間関係に果たす役割の重要性、情報をうる権利や表現の自由とマスコミの自由との関連など、コミュニケーション全般について学習する。ちなみに、小単元「好奇心に富んだ目はTRTで」のTRTは、トルコ国営放送の略語である。第2単元は主にトルコの人口についての学習であるが、教育や労働の権利、住居と移動の自由といった権利・人権に関する学習内容も含まれている。第3単元はセルジューク帝国とオスマン帝国についての通史学習で、6年生の第5単元の継続

的な内容である。第4単元では生産技術の発展が社会経済的な生活に与えた影響などについて学習するとともに、職業選択の計画を立てることになっている。経済学習と子どもにとって切実な進路選択をうまく統合した単元である。第5単元は、まさに科学史についての学習となっている。第6単元では、立法、社会組織、社会活動などでみられる民主主義を中心に学習し、第7単元では第一次世界大戦を導入的な事例として、主にグローバル問題とその解決や、人類の遺産としての思想・芸術・文学について学習することになっている。7年生の学習題材は、6年生の内容を継承しつつ、地理的空間的に拡大し、歴史的時間的に深化させた内容が取り上げられるとともに、民主主義・権利・コミュニケーションなど社会認識を一層深める主題が扱われており、4・5年生との発達段階の相違が考慮されたものとなっている。

従前の課程では、身近な地域から国土全体、さらには隣国やトルコ民族の世界に繋がる同心円拡大方式による地理学習と、トルコ民族の来歴からオスマン朝の成立と盛衰にいたる通史学習が、それぞれ中心的な役割を担っており、民主主義について学ぶ政治学習などの公民的分野は、いわば付け足し程度の扱いでしかなかった³⁾。換言すると、従前の「社会科」は地理学習と歴史学習を通じてまさにトルコ人としてのアイデンティティを育成することが目標であった。しかし新課程では、学年ごとの学習内容を確認したように、そうした地理学習や歴史学習が圧縮されて、生産消費活動や経済の発展と科学技術等に関する経済学習、アタテュルク主義・民主主義・行政等に関する政治学習、社会組織やコミュニケーションなど現代社会についての学習といった公民的分野に関する学習内容が、大幅に追加されて充実したものになっている。さらに新課程では、4年生と5年生での国際理解の学習や、6年生の世界の産業・経済やトルコと世界の結びつきに関する学習、そして7年生でのグローバル問題の解決や人類の遺産の学習というように、世界に関する学習が大幅に取り入れられるようになった。

こうした学習内容の構成は、「社会科」が従前の地理学習と歴史学習を中心とした寄せ集めの学習内容から、三分野のバランスを図った総合的な社会科に脱皮したとともに、単にトルコ国民としての意識形成だけでなく、グローバルな視野を持ったトルコの公民・市民を育成することに目標が置かれるようになったことを、意味していると考えられる。ただし、従前の課程では7年生と8年生で教科「公民と人権の教育」を学ぶことになっていたが、新課程ではこの教科は廃止された。同教科は、民主主義に基づく憲法や人権などについての理解を図ることが目的であったが、その学習内容が実質的に「社会科」に吸収された可能性があることも、指摘しておきたい。

新課程における「社会科」は、学習内容が一層社会的になったばかりではない。公民としての社会参加能力の育成が主たる目標に措定されており、そのためには社会科学者が身に付けている科学的な思考に基づく情報処理能力が獲得されなければならないし、コミュニケーション能力が開発されなければならない。こうした方法知の習得には、教科書に依存し、事象の暗記に向かいがちな説明・記憶、質問・解答といった形で学習されてきた従前の教師中心の知識授受型的手法では、当然対応できない。子ども自身が疑問を持ち、調べ、考え、発見、比較、説明、討論し、前の学びと関連付けて、評価し、知識を新たに構築するような、子ども中心の学習が必要となる。活動的に学習する子どもが、批判的で創造的な思考を持って学習過程を展開することが不可欠なのである。このような学習を通じて、有用なコミュニケーション能力を有し、創造的で、複雑な問題を解決し、意思決定できる子どもが育成されると期待できるし、そうした能力が公民的な資質の必須の要素であることは、言うまでもない。

3. 「社会科」指導書にみる授業の構想

3-1 「社会科」学習材と教師用指導書の構成

教師中心型の授業に慣れきっている教師たちには、前述のような新たな理念による「社会科」を実践していくのは容易なことではない。問答式の指導法しか知らないような教師が、学習者中心の指導過程を十分に認識・理解しているとは考えられないし、ましてやそれを可能にするための様々な学習活動を準備し

なければならないことは、まさに至難な業である。そうした教師たちに新しい理念に基づく「社会科」を周知徹底させるためには、新たな“仕掛け”が必要になってこよう。そのための方策として、新課程では教科書のほかに生徒用作業帳が配布されている。新課程に即した様々な学習活動が想定されるわけだが、そうした学習活動も国民教育省が用意したのである。ちなみに、教科書も生徒用作業帳も国定で、無償支給となった。

教科書の具体的な記載については単元の分析で詳説するが、教科書自体が従前のものと異なり、本文よりもカラフルな図表や写真、文書資料が多く記載されている。そして、それらに関する質問も記述されており、学習内容が要約された旧来型の読み物としての教科書ではなく、まさに学習材が提示された資料集とも言うべき教科書となっている。なお、それぞれの単元末には、単元での学習評価を生徒にさせるべく、正誤択一問題、選択肢問題、穴埋め問題、組み合わせ問題、文章作成問題と、単元に関連する生徒用参考文献リストが提供されている。

生徒用作業帳ではそれぞれの単元に応じ、思考能力を発達させる学習活動として、パズルの解答、穴埋め、文章作成、色塗り作業、図表の解読などの作業があたえられている。そのために必要な写真、地図、文書資料が適宜記載されていることは言うまでもない。そして、教科書と同様各単元の終わりには、自己の学習評価手引きが提示されている。さらに、巻末には単元に関連するパフォーマンス課題と研究計画課題、および自己やグループでの学習評価に関する書式も記載されている。

こうした教科書や生徒用作業帳といった学習材がどのように活用されるのかが、新教育課程成否の鍵となるところであるが、それを成功裏に達成させるために作成されたのが教師用指導書である。指導書では、まず新課程による「社会科」の理念や目標、学習活動、学習評価などについて概説されている。とりわけ、6年生用・7年生用では、学習者の自己評価のための書式も例示されている。そして各単元の導入ページで、その単元で獲得されるべき目標、単元の構成、その単元で学ぶ概念、その単元と関連する他教科での学習事項、その単元に関係する特定の行事日や行事週間、その単元で直接育まれる能力や価値、その単元で利用される文献が示されている。

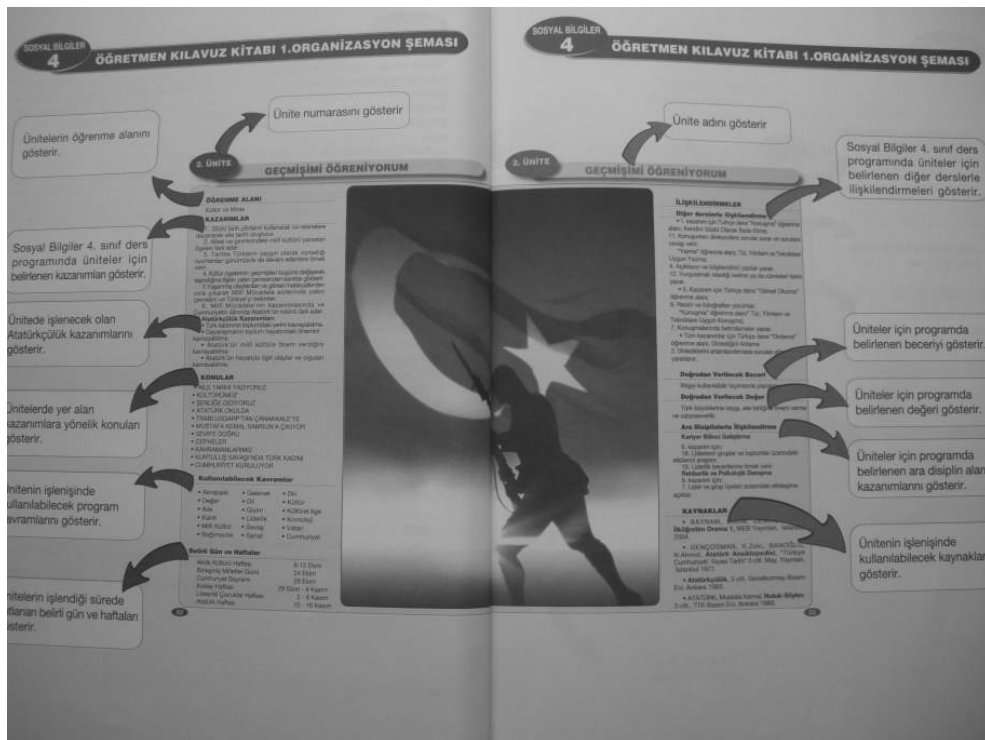


写真1・指導書の単元導入対応（中央部の写真）を図解した4年生用指導書のページ

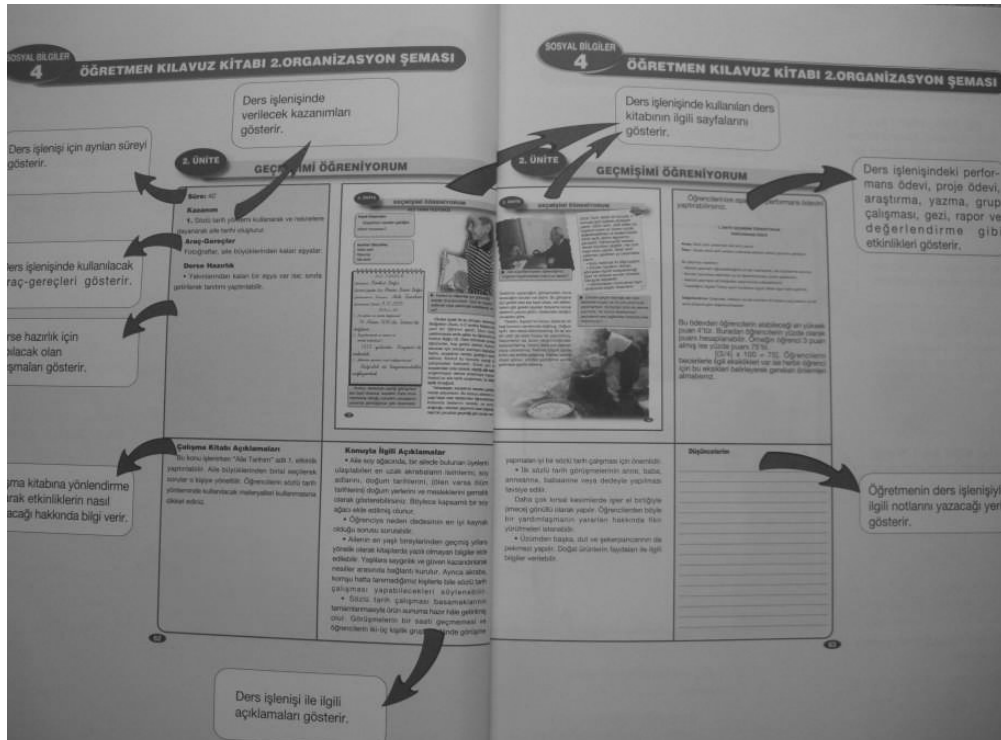


写真2・指導書の教科書対応構成（中央部の写真）を図解した4年生用指導書のページ

各単元の具体的な授業展開の解説については、4年生用・5年生用と6年生用・7年生用とでは、若干方式が異なっている。4年生用・5年生用では、導入ページに続いて教科書の見開きページに対応して、それぞれ基本的には4つの項目に区分され解説されている。1つ目は、その見開きページでの学習における授業時間、習得されるべき目標、用いられる教具・学習材と授業への準備についての留意事項が示されている。そして、2つ目に生徒用作業帳における諸活動に関連する説明が、3つ目にパフォーマンス課題を含めた学習活動例や評価の種類が、4つ目にテーマに関連する説明が、それぞれ示されている。教科書にはそれぞれの単元末に学習評価のための問題が出題されているとおりで、指導書でも教科書に対応して、その問題の解答が記されている。各単元末には、その単元に対応する生徒用作業帳がそのまま転写されているが、特に解説はなされていない。

6年生用・7年生用では、単元の導入ページに続き、6年生の一部の単元と7年生のすべての単元で、その単元のパフォーマンス課題や研究計画課題とその評価のための書式が示されている。そして、各単元の具体的な授業展開の解説に続くわけだが、主題が示されているそれぞれの小単元ごとに、習得されるべき目標、授業時間、用いられる学習材・教具と授業への準備に関する留意事項、教科書の活用方法、学習活動例、学習内容項目の詳解、関連する他教科の学習内容など授業実践上の指導事項、生徒用作業帳活用についての概説が記載されている。そして教科書の各単元末に記載されている学習評価としての設問に対する解答が示されている。6年生用の指導書ではさらに、各単元に関連する行事日や行事週間の説明と、単元によっては関連する学習活動例が紹介されている。

各単元の具体的な展開が示されたあとの巻末には、各学年とも用語解説、年表、文献リストが掲載されており、教師の指導の便宜が図られている。なお、4年生用・5年生用については、「社会科」で習得される目標と関連する他教科でのそれとの連関表や評価に関する概説も記載されている。

以下の各節では、学習材とその活用法を示した指導書をもとに、具体的な単元について授業の展開を考察してみることにする。事例として取り上げる単元は、紙面の制約もあり、各学年から1単元ずつとし、その単元に関連する単元に随時言及することにしたい。また、従来「社会科」ではトルコ人としてのアイ

デンティティの育成が強調されており、国土とトルコ地誌、トルコ人とその通史およびトルコ革命が取り上げられる学習内容として重視されてきたので、それらに対応する単元を分析の対象とした。また、新課程の「社会科」では従来の社会科では取り上げられなかった学習内容も盛り込まれているので、そうした新規の学習内容の1つにあたる国際理解の単元も分析の対象とした。以上の要件を満たすべく、4年生からは「第2単元：私の過去を学んでいます」、5年生からは「第8単元：私たちみんなの世界」、6年生からは「第3単元：私たちの国の資源」、7年生からは「第3単元：トルコ史の旅」を、それぞれ取り上げることとした。

注

1) 使用した指導書は以下の通りである。

Tekerek, M. vb. (2006): İlköğretim 4 Sosyal Bilgiler Öğretmen Kılavuz Kitabı. Devlet Kitapları. (4年生用)

Karagöz, D. vb. (2006): İlköğretim 5 Sosyal Bilgiler Öğretmen Kılavuz Kitabı. Devlet Kitapları. (5年生用)

Genç, E. vb. (2006): İlköğretim 6 Sosyal Bilgiler Öğretmen Kılavuz Kitabı. Devlet Kitapları. (6年生用)

Polat, M. M. vb. (2007): İlköğretim 7 Sosyal Bilgiler Öğretmen Kılavuz Kitabı. Devlet Kitapları. (7年生用)

2) スルタン制の廃止と共和制の宣言をした共和主義、トルコ民族の歴史と伝統を自覚して健全な愛国心と国民文化を昂揚する民族主義、国民全体が政治的・経済的・社会的開発に参加して、等しくその利益を受けるべきだとする民衆主義、国家が各種の企業を育成して運営することで、経済的自立を達成しようとする国家資本主義、カリフ制の廃止と政教分離政策の世俗主義、イスラム的伝統への追従を排除して、文化・社会の発展を強調する革新主義の六原則である。ただし、国家資本主義については1980年代に大転換が図られている。すなわち、自由開放経済政策や経済構造改革が着手されて、輸出振興、輸入自由化、国営企業の民営化が実施された。

3) 従前の教育課程による「社会科」の学習内容については、拙稿(2006)を参照。

引用文献

拙稿(2006):「トルコにおける社会科教育の動向と課題 ―教科「社会科」を手がかりに―」『社会科教育研究』第98号, pp.84-92.

拙稿(2009):「トルコにおける新教育課程での地理教育の動向」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)』第11号, pp.109-122.

Öztürk, C. ve D. Dilek, ed. (2005): Hayat Bilgisi ve Sosyal Bilgiler Öğretimi. Pegem A Yayınları.